

ロコモティブ症候群の要因となる骨粗鬆症の診断と治療のための精密検査について

平成 26 年 10 月放送

朝田 尚宏

メタボリック症候群からきたメタボは大分一般の方々の認知度が上がったと思いますが、ロコモと言われてピンとくる方はどれくらいの割合でいらっしゃるでしょうか。

ロコモはロコモティブ症候群の略称ですが、運動器による日常動作が障害されている病態の総称です。メタボ検診によって、肥満の程度を調査するために腹囲、体重や血圧を測ったりします。ロコモ自体をしっかりと捉える指標がないのが現状ですが、その中の一つの病気である骨粗鬆症に今回は焦点をあててお話を進めて行くことにしましょう。

骨粗鬆症の診断と治療効果の判定に有用な検査は、通常の腰のレントゲン写真と血液検査と骨密度検査になります。腰を含めた背骨のレントゲン写真はどこの病院でも診療所でも医院さんでも撮影できる低コストで早く結果も判定できる簡便な検査です。レントゲン写真では骨の形を見て潰れているかいないのかを三段階で評価し、潰れているとすれば一箇所なのか複数個所に及ぶのか、背骨のバランスが崩れ猫背になってきているかどうかを慣れた整形外科医であれば瞬時に判断することができます。患者さんが痛がっているのにレントゲン写真では背骨の骨折が見当たらない場合は、いわゆるヒビとしての亀裂骨折という状態を考えます。その場合、MRI という 30 分程度時間を要する検査を追加で受けて頂くようにしています。ただし、検査が予約制で緊急に撮影できにくく、やや費用が高いことが難点となっています。血液検査では骨を破ると書

く骨を食べる役割をする破骨細胞が増えているのか、またその破骨細胞が骨を食べて分解した成分が血液中に増加してきているか否かが客観的な数字として表示されます。結果が出るのに約 2 週間弱かかるのが弱点ですが、他の検査ではわからない今後の骨密度の減少が加速度的に起きるのか横ばいで行くのかを推測することができます。また、骨粗鬆症に対する薬を飲んだ際の効きめの判定に使うため、内服後数ヵ月後に再度血液をとって評価を行うことが保険診療で認められています。



最後に骨密度検査ですが、全身のどの部位の骨を評価するかが問題となります。通常は腰椎の骨密度を代表部位として測定します。市立敦賀病院における骨密度検査では、補助的に股の付け根の骨、大腿骨の骨密度を同時に測定するようにしています。それは背骨の骨の成分がへちまのスポンジのような緻密な海綿骨の割合が多いのに比べて、大腿骨の骨の成分が硬い鉛の管のような皮質骨の割合が多くあり、海面骨を多く含んだ骨のほうが、より骨粗鬆症の薬剤に反応しやすい傾向にあります。前腕の骨の骨密度も測定することがありますが、何故、腰の骨、大腿骨の付け根、前腕の骨を測定するかというと転んだ際に骨折を良く引き起こす部位であり、将来起こるであろう実際の骨折の危険性を予測したいからです。

以上、本日はロコモという言葉の紹介と骨粗鬆症の診断と治療に必要な検査の実際の意味合いについてお話して参りました。検査をご希望の際は、整形外科、内科、婦人科が治療にあたっていますので、ご相談ください。